

## 国内初、空港グラハンに人型ロボ実証

### ■ JGS / GMO AIR、羽田でコンテナ移送

JAL グランドサービス (JGS) と GMO AI&ロボティクス商事 (GMO AIR) は27日、5月から空港におけるヒューマノイドロボット活用に向けた実証実験を開始すると発表した。3社 (JAL、JGS、GMO AIR) によると、空港でのヒューマノイドロボット活用に向けた実証実験は国内初という。羽田空港でコンテナ移送業務への導入を想定する。

両社は同日、JALの羽田空港格納庫内で同ロボットをお披露目した。現在、JGSは航空機へのコンテナ積み込みを5~6人で行っているが、将来的には「作業人数の半減を目標としている。自動運転などの他の施策と組み合わせることで目指していきたい」(JGS)と説明した。

同ロボットはグラハン業務のうちコンテナ移送の一部を担う想定で、コンテナを押す動作を披露した。使用したのは、「Unitree G1」で、全長130

センチ、重量35キログラム。連続稼働時間は2時間、歩行速度は毎秒2メートル。扱える重量や出力の違いを踏まえ、今後は複数の機種の実証実験を計画している。

実証実験は2026年5月から28年までを予定する。初期段階では業務の可視化・分析を行い、安全に作業できる領域を特定。その後、実際の空港環境を想定した動作検証を重ねる。将来的にはロボットが人の作業を補完し、省人化と作業負担軽減を通じた持続可能なオペレーション体制の実現を目指す。

具体的には、26年5月からレバー操作、同下期には約1.5トンのコンテナを押下、27年にはドーリーの回転操作や一連の移送動作の開発を進め、28年度中のトライアル運用を目指す。



JGSの鈴木美輝社長 (中央)、GMO AIRの内田朋宏社長 (右端)

JGSの鈴木美輝社長は「JALグループは30年度に25年度比で10%の生産性向上を掲げており、空港でもロボット導入を進める」と説明。「現場に即した実用性の高いソリューション開発に注力する」と述べた。

GMO AIRについて、鈴木社長は「安全性と作業品質を両立する高品質なヒューマノイドロボットを開発できる」と評価。GMO AIRの内田朋宏社長は「空港は24時間365日稼働するインフラであり、ロボットのために改修することは現実的に難しい。ヒューマノイドは既存の設備にそのまま導入できる点が利点だ」と強調した。



コンテナを押すヒューマノイドロボット



コンテナを回転



レバーを操作